

日本記者クラブ会報

第 445 号
2007 年
(平成 19 年)
3 月 10 日発行

〒100-0001
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル
◎ 社団法人 日本記者クラブ
http://www.jnpc.or.jp

胸襟開きたっぷり小沢節

会見のタイミングはあまりよすぎてもよくない場合がある。

前号で報告したように安倍首相は 1 月 16 日、当クラブで会見。続いて 26 日、国会で施政方針演説。それか

ら 1 週間ちよつとの 2 月 6 日（午後 5 時～6 時 30 分）に、民主党・小沢一郎代表の会見が決まったときは実はうまくいったと思った。が、会見の前日だったと思うが、

渡邊誠毅元理事長（元朝日新聞社長 92 歳）が 2 月 11 日、肺炎で死去した。闘病が長かったので、覚悟はしていたが、ハラにこたえる計報だった。

このクラブが存続する限り決して忘れてはいけない。大恩人が 2 人いる。

渡邊元理事長が死去

どにあたられた。

初代理事長の原四郎さん（元読売副社長・国際新聞編集者協会のプレス・フリーダム・ヒール 50 人に日本からただ一人選ばれた）と、3 代目（73～78 年）の理事長を務めた渡邊さんである。このお二人によってナショナル・プレスクラブの礎が固められ、現在の形が

できたといつてよい。お二人をクラブのご本尊だと思つて、仕事をさせてもらっている。渡邊さんは理事長退任後、朝日の社長、新聞協会会長に就かれた。社長として築地本社移転、協会の会長として販売正常化などにあたられた。クラブの理事長を務めたあと、渡邊さんと同じコースを歩まれた中江利忠さんには、主に先輩新聞人としての渡邊さんを。当時、総務部長だった桂敬一さんには、渡邊さんのクラブでの仕事についてそれぞれ思い出を寄せていただき、追悼することにした（次ページ）。

6 日午後 7 時院内での 3 党党首会談が決まってしまった。愛知の知事選で善戦、北九州市長選は勝利という結果も出たので、それまでの欠席戦術を止めて、民主、社民、国民新党は 7 日から国会に出て新年度予算の審議に入るだろうとみられていた。が、審議入りか否かは党首会談という段取りだったので、そのへんの質問はみんな空振りになる。

台風の目の中に入ったみたいな会見になった。もちろん、報道の焦点も「3 党党首会談」に集中する。野党共闘を大事にする小沢代表にとつては、それでよかったのかもしれないが。

悪いことばかりではない。まず代表の機嫌がすこぶるよかった。会見時刻の 1 時間前に、山形（参院選候補決定）から羽田に到着。党本部で小憩後、笑顔でクラブへ到着した。冒頭発言は 5 分程度。「（記者会見は）わたしが一方的にしゃべる場ではないと思いますので」と、この後はすべて質疑応答に。司会者を含めて 13 人 34 問の質問に胸襟を開いて

いねいに答えてくれた。

小沢さんの「見果てぬ夢」と、その背景・根拠になっている日本および日本人についての基本認識を考へるにはよい機会になった。発言の端々に小沢さんの政治センス・信念がうかがえた。柳沢発言についても、女性の権利、女性蔑視の問題だけでなく、安倍内閣の言葉と主張に一貫性のない、いい加減な体質が表れてきている、といった具合。

アジア取材団 2月25日出発

一行は団長の脇祐三さん（日経）、副団長の田中紀志夫さん（共同）、川戸恵子さん（TBS）など 16 人。帰国は 3 月 5 日。WTO に加盟し、日本からの第 2 次投資プームで活況のベトナム、経済連携協定（EPA）締結で正式合意したインドネシアを訪れる。加盟、正式合意は昨年 11 月。ハノイでズン首相、ジャカルタでユドヨノ大統領に会うことができれば、「日本記者クラブ取材団と会見し」と報じられるはず。キヤノン、トヨタなどの工場を視察し、進出企業幹部とも意見を交換する。取材団の報告は次号で。

（2・23 専務理事 岩崎玄道）



昭和天皇・香淳皇后記者会見で理事長として代表質問を行った
(1975. 10. 31 皇居「石橋の間」)

知る権利に応えた多様な活動 オールラウンド・プレーヤー

中江 利忠

渡邊誠毅さんの突然の訃報を受けてご自宅に駆け付けると、1年半ぶりに拝顔した大先輩は、眠りの口元にかすかな微笑みさえ浮かべながら、あの流麗な語りか今にもほとば

しり出るような姿であった。

渡邊さんは、朝日新聞の経済記者、編集局長、労務担当、社長、旧友会会長として私の先輩だったし、日本記者クラブでも4代前の理事長、新聞協会でも2代前の会長だった。

1973年から5年余りの第3代理事長を務め、天皇・皇后両陛下との記者会見などクラブとしての初めての偉業を次々に成し遂げた渡邊さんは、根っから硬骨のジャーナリストだった。

経済記者だった昭和23年、GHQの指令で政府が作成中だった日本経済の集中排除の綱をスクープし、続けてパンキング・セクションが銀行の集中排除を検討中だという記事も書いた。

翌日、永井大三業務局長(後の販売担当)から呼び出しがかかったので初対面の永井さ

渡邊誠毅(わたなべ・せいき)氏 1939年朝日新聞入社。経済部記者、論説委員、調査研究室長、大阪本社編集局長などを経て、常務取締役東京本社代表、専務取締役編集担当、代表取締役副社長などを務める。77年代表取締役社長。84年退任し、89年まで相談役。72年クラブ理事となり、73年から78年まで第3代日本記者クラブ理事長を務めた。82年から84年まで日本新聞協会会長も務めている。

んの部屋に行くと、先に来ていたメインバンクの役員が「こんな記事で責任の重い朝日に書かれては銀行、ひいては日本が困る」と食ってかか

る。しかし渡邊記者は慌てず「目の前で起こりつつある事実を報道したに過ぎず、銀行の集中排除をやれともやるなども書いてはいない。現にこの記事を読んだから、あなた方も対策に動き出せたのではないか」と答

えると、相手も引き下がったという。もともと父と同じ軍人になるのを嫌い、昭和恐慌下の農村の疲弊を憂えて大学の専攻は農業経済を選び、駆け出しの札幌支局時代には北大生中心の農業研究会に加わって治安維持法で投獄された経験もある。

本社では農政記者、原子力担当の論説委員、そして安全保障問題調査会主査、調査研究室長として十分に理論武装、大阪編集局長から編集担当専務に至るまでも経営計画の総合企画室長、労務・出版担当を歴任し、記者としても経営者としてもオールラウンド・プレーヤーだった。

その渡邊さんは日本記者クラブ理事長を務める間、朝日では編集担当専務と副社長だったが、特に第一線の記者に対する指導は綿密なものがあつた。

全国の支局長や通信局長を集めた会議では、思い上がりや主観的な価値観で記事を書くな、「たれ込み」に安易に乗るな、「事実上の倒産」といったあいまいな表現は使わない、皿回しの真剣な芸に劣らない厳密さで取材せよ、と具体的な記事の例を挙げながら説いてやまなかつた。

「多様化する『知る権利』に応じ、日本の民主政治、国民生活の安定、国際平和の確保など、報道言論機関本来の使命を見つめて、多様な活動を展開しなければならぬ」(日本記者クラブ最後の1978年年頭あいさつ)という渡邊さんの訴えは、今でもこそ貫徹されるべき課題だ。

(第7代理事長 名誉会員 元朝日新聞社社長 なかえ・としただ)



史上初の米現職大統領の訪日 フォード大統領を紹介する渡邊理事長 (1974. 11. 20 昼食会 帝国ホテル「富士の間」)

渡邊誠毅さんの計報に接し、一瞬名状しがたい思いに駆られた。新聞協会事務局で組合活動に没頭中の1974年、突然管理職に昇格、日本記者クラブに総務部長で出向せよと命じられた。渡邊さんがクラブ理事長だった。そしてこの理事長が、「不当配転」ごときでいじけているのかと、私をどやしつけてくれた。

帝国ホテルに間借り中のクラブは、現在のプレスセンター・ビル竣工とともにそこに移転、名実ともに

ナショナル・プレスクラブとなることを目指していたが、眼前には二つの難題が立ちはだかっていた。

一つはハコモノ問題。ビル9階のクラブ施設は自前の財政措置で仕上げねばならない。だが、73年の石油ショックで諸資材が高騰、当初予定の倍以上の資金手当てが必要となった。ビル会社自体も

同様の打撃を被っていたが、加えて、新聞・放送共同で設立したこの会社から民放全社がいつせいに抜けるという厄介がもちあがった。これは多分に当時の新聞側トップの、いつてみれば民放側軽視の姿勢が招いたものだったと、私は感じている。

これがクラブにも波及したら大変だ。理事長はこの事態に対して、細心にして豪胆な配慮をもって臨んだ。ビル建設で同一歩調が取れないにしても、記者活動でクラブを一緒に活用することはできると、誠意をもって民放側を説きつづける一方、

細心で豪胆だった

桂 敬一

万が一の場合に備えたフロア半分削減などの設計・仕様変更まで、私に検討を命じられた。

「ナベちゃんがそこまでやってくれたんなら、いやとはいえない」という上子俊秋・三浦甲子二の放送側理事両氏に理事長が頭を下げ、礼を述べるのを見ながら、立会いの事務局としても、ほっとしたものだ。

もう一つの課題は、りっぱなお神輿にはりっぱなご神体を納めること。そこで理事長直々のリーダーシップのもと、74年11月のG・フォード米大統領のプレス・ランチョンと、75年10月の天皇・皇后記者会見とが、実現した。

前者に関しては、政府の国賓招待閣議決定より早い段階で理事長がホッドソン米大使を直接訪問、大統領宛の招請状を手渡し、昼食会実現のきっかけをつくってくださった。もちろん当日はみごとなホスト役を演じられた。だが、とくに忘れられないのが、訪米後の天皇・皇后に対する記者会見実現に果たされた理事長の役割と、その胸中のこと。

訪米前のある日、「きみ、いく前の会見はアメリカにしてやられたが、帰ってからはこっちがやらんといかんぞ」と電話してこられた。それから実現までの山坂はいろいろあるが、その一々の解決に実に細やかに対応してくださった。そして忘れもしないが、すべて終了した後、理事長は重いカゼに罹り、かなり長い間、社のほうも休まれた。

「牢屋にいたとき、おふくろに心配かけるのがずっと気がかりだった。天皇会見はおふくろを安心させたことになるかもしれん」

77年、新居に移転したクラブを辞め、新聞協会に戻った私は、理事長に浜松町で上海蟹をご馳走になりながら、天皇に反逆したときされた受難の話をうかがった。彼は治安維持法違反で逮捕されたが、研究会仲間のことは沈黙を守り、敗戦まで網走刑務所に入れられていた。

気骨あるジャーナリストがまたひとり去っていく。

(元総務部長 個人会員・立正大学 文学部講師 かつら・けいいち)

マッシモ・ダレーマ
イタリア副首相・外相



2・2(金) 記者会見 司会 宮田謙一委員
通訳 田丸公美子 深川充子 出席 107人

▼イラク解決は多国間主義で

委員長を務める左翼民主党(DS)は冷戦終結期、共産党から社会民主主義政党へと変身を遂げ、活路を開いた。既成政党が次々と没落し、イタリア政界が中道左派と中道右派の2大勢力に取れんされた90年代、DSは中道左派連合「オリーブの木」の中核を担う政党に。首相経験もあるが、今回は昨年5月に発足したプロデイ政権の副首相兼外相として来日した。

「米ブッシュ大統領の単独主義は誤り。多国間主義が解決策」「外国の軍隊が増派してもイラク和平には寄与しない」。自身の確固たる信念を示すため、イタリア部隊を昨年12月イラクから撤退させたと熱っぽく語った。

朝鮮半島和平や拉致問題などに触れ、対アジア外交強化を力説したのも、米国一辺倒だった中道右派のベルスコニ前政権への痛烈な批判からくるものだ。

ローマ特派員時代によく耳にしたイタリア国民のダレーマ評の一つは「良くも悪くも固い」。折しも日本では柳沢厚労相の問題発言騒動の真ただ中。イタリアからは、女性を口説いたベルスコニ前首相に妻が公開書簡で謝罪を迫ったとの「強い女」のニュースが届いていた。

ある記者がこの2つを対比させ「イタリアは女性の地位向上にどんな努力をしてきたか」と質問。この質問にイタリア男らしくなく「ユーモアひとつ交えず「男女平等のための諸政策」を「直球」で語ったあたりは、共産党政治家二世の面目躍如か。

連立与党内の造反に伴って起きた最近の国政の混乱は一応、収束に向かったが、議会での与野党伯仲の現状は変わらず、政権ナンバー2として今後も難しい政権運営を強いられそうだ。

共同通信外信部

五井 憲子

小沢 一郎 民主党代表

▼参院選に向けあふれる気力

北九州市長選を制し、愛知県知事選で現職を「あと1歩」まで追いつめてから2日後の会見。夏の参院選に向けて手応えを感じているのだろう、気力にあふれて見えた。

「とにかく参院選で野党で過半数を得る。そこから政局の転換をはかり、我々の思いを政治に反映させていくのが目標だ。今月も来月もその次も、月の半分以上は地方に出る予定にしている」。何はともあれ、選挙、選挙の小沢節である。

興味深かったのは「民主党がめざす社会像は何か、それがいまひとつ分からない」という質問に、じっくり時間をかけて答えたことだ。

「日本という国は平等を政治の旨と心がけてきた。それは結果として官僚統制を招き、規制社会を招く。その社会が今、変化の中で機能し切れなくなり、矛盾が噴出してきている。米国流の市場主義、自由を重んじるやり方と、安定と平等を重視する日

2・6(火) 記者会見 司会 影山日出夫委員
出席 202人

本社会のシステムをうまく調和させる。そんな社会がベストだと思う。新しい日本から、新しい近代国家のモデルを世界に発信する」。そんな見果てぬ夢を見ている。もうひとつ、意外だったのは小沢氏の「無党派」観だ。



写真=産経新聞社

「日本人はだいたい無党派だ。何が何でも自民党、何が何でも民主党という思想的、哲学的な背景をもっていない人が多い」「だから広範な人を包み込みながら、多数を獲得する以外にない。みんなで力をあわせて頑張ること

に努力を傾けたい」
広範な人を包み込む。その姿勢こそ、かつての「壊し屋」オザワに欠けていたものではなかったか。
「政権獲得のため、まず私自身を改革する」。昨春、代表就任時の小沢氏の誓いは、少なくともその1点で守られているように見えた。

朝日新聞論説委員

恵村順一郎

高橋 祥友 防衛医科大学校教授

2・7(水) 著者と語る「自殺予防」
司会 菅沼堅吾委員 出席 56人

▼報道の仕方です群発自殺誘発

「メディアの報道の仕方が群発自殺を誘発している」という高橋教授の厳しい指摘は、かつてテレビ報道に携わっていた私にはショックだった。

高橋教授は、一人の自殺が他の複数の自殺を引き起こす現象「群発自殺」がメディアによって引き起こされたことと指摘する事例を、1986年に起きた歌手の岡田有希子の自殺報道から昨年10月の北海道滝川市の小学生のいじめ自殺報道に至るまで新聞記事や写真、テレビ映像など具体的な例を示しながら説明し、内容は説得力のあるものだった。

「自殺者がでた学校で校長が生徒を集めて『命を粗末にするな』と説くことは群発自殺を引き起こす恐れがあり非常に危険」



「精神科医としての自分の体験では、子どもが助けるを求めているサイに親が気づかず、学校

の先生が見つけて通報してきた例が、これまでに報道されたいじめ自殺の件数の数十倍はあった」

という私にとっては意外だった指摘もあり、自殺報道では取材する側の使命感や思い込みだけで動く危険だという認識を深めた。

「遺書の内容を報道するのは非常に危険」という指摘にはテレビの会員から「報道しないと、いじめの加害者の存在を隠すことになるのでは」という疑問も出されたが、OBの会員からは「先生の話を是非、現場の若い記者たちに聞かせたい」という意見があった。

メディア、特にテレビが社会に与える影響が非常に大きくなっているのは周知の事実であり、その巨大な媒体力が群発自殺を誘発しているとしたら社会問題である。

自殺報道についてメディア自身は、専門家の指摘に耳を傾け、取材・報道の仕方を検証してガイドラインを作るようにしていかないと、将来外部から規制されたり、遺族から加害者として訴えられる日が来るのではないかとという危惧をいだいた。

フジテレビ出身

丸尾 寿一

リチャード・マニング
OECD開発援助委員会議長

2・13(火) 記者会見 司会 中井良則委員
通訳 澄田美都子 出席 61人

▼転機を迎えるODA

国際的にも、日本を取り巻く情勢という意味でも、政府開発援助(OEDA)が転機を迎えている。

急速な経済発展に伴い、中国、インドをはじめとする経済協力開発機構(OECD)非加盟の途上国などがドナー大国として台頭。一方では欧州諸国のODA拡大策もあり、90年代に世界最大の援助国だった日本の存在感は低下し、国際社会から支出増額を強く求められている。

記者会見でも、こうした点での懸念や危機感が場を支配していたように思う。英独仏の欧州3カ国を少し上回る程度まで援助額が減った日本自体への影響や、中国の動向などに



質問が集まりました。それに
対し、マニング議長は
簡潔にして明瞭。
「日本が

財政的に厳しいことは承知している」と一定の理解を示しつつ、出身国である英国が、97年以降のODA拡大措置で国際的な発言権が高まったことを引き合いに出し、「ほかの優先課題に対して、ODAがどの程度優先かを考えることも重要だ」と

日本の役割拡大に期待を示した。新興ドナーの存在については「途上国の選択の幅が広がり、歓迎されるべきこと」と述べる半面、課題も指摘した。

今回の来日直前に中国を訪問した際には、開発協力についての透明性改善とプロジェクトでの持続可能性の配慮、さらにほかのドナー国と意見交換の機会を設けるよう、中国側に伝えたという。

日本は08年の先進8カ国首脳会議(G8サミット)主催国。激変する世界情勢の中で、発言力強化のツールとして引き続きODAを活用するとともに、途上国の次の世代の人々の発展・育成につながる持続可能な援助のあり方に向け、もっと知恵を絞る必要があると感じた。

日刊工業新聞経済部

藤元 正

津島 雄二 自民党税調会長

2・14(水) 記者会見 司会 長谷川幸洋委員
出席 12人

▼社会保障と税で国民合意を

自民党税調会長の会見は加藤六月氏以来20年ぶりという。20年前といえば、86年に中曽根内閣が売上税構想を出して挫折し、88年に至って竹下内閣で消費税導入が決まる、その当時のことである。

こんどは消費税増

税がちらついている。関心もそこへ集まるが、津島会長はいよいよ増税だというざらついた印象を与えず、増大する社会保障給付に向き合う「国民的合意」の大切さを諄々と説いた。

政府税調は中長期的なあるべき税制の姿を政府に答申する。党税調は政権与党として毎年度の税制改正案をまとめ国会で成立を図る。

その役割分担の一方の政府税調が、安倍内閣になって、財政再建のために消費税増税を主張する会長の再任が拒否され、替わって景気回復の「上げ潮路線」を先導しようと法



人税減税を主張する会長が任命され、そのとたん新会長がスキャンダ

ルで辞任という騒ぎで揺れた。

カゲの薄くなった

政府税調のぶんまでという意気込みか、

津島会長は「3%成長が4%になれば増税が要らないという

ことなど、ありえない」と政権中枢の「上げ潮頼み」をチクリ

とやり、将来、消費税を社会保障目的税にして増税するという意見に

「私は賛成だ」と明言した。

肝心なことは、年間80兆円になる

社会保障給付が、少子高齢化とともにこれから毎年3兆円ずつ増えてい

く、これとどう向かい合って、税制と社会保障料などの抜本改革に国民

の合意をつくるかだ、と強調した。

自民党税調トップが「一党一派に偏せず」に社会保障と税のあるべき

姿を考えるのはいいことだ。問題はそれを「党利党略抜き」の議論に収

れんさせる手立てがあるかどうかだ。

朝日新聞出身 見市 元

ヴァーツラフ・クラウス チェコ大統領

2・14(水) 記者会見 司会 竹田保孝理事
通訳 池田薫 出席 59人

▼独自性生かした外交目指す

「96年に初めて首相として訪日し、このクラブに参りました。10年半たつてまた来られて光栄です」

2度目の来日、しかも今回は大統領としての訪日だけに、一国の元首としての重みを強く感じた。

スピーチでまず大統領は、現地に進出した日本企業がこの10年間で3

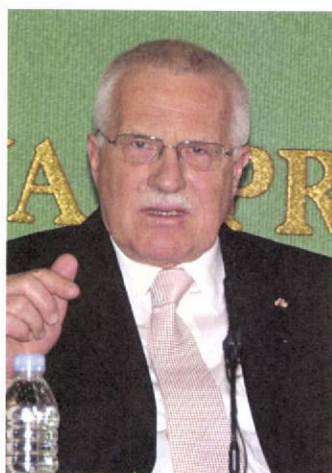
倍以上に増えたこと、日本の投資額が外国企業のなかでドイツに次いで

2番目であることを指摘し、両国関係がいかに順調に発展してきたかを

強調した。

続いて大統領は、北大西洋条約機構(NATO)と欧州連合(EU)

への加盟を果たしたと述べ、「今はこの利点を生かすこと、その一方で



自由を失わないようにしたい」と発言した。とかくこうしした組織に加盟すると小国は埋没してしまいがちなだけに、個性を失わず、独自性を発揮したいと付け加えた。

質疑では、米国のミサイル防衛(MD)リーダー基地をチェコに建設するというホットな話題についての質問が相次いだ。大統領はこの件で米

国と数日前に協議を始めたばかりで「今結論を言うのは時期尚早だ」とかわした。その一方、「今のNATOの防衛システムで十分満足している。二重の防衛システムを作ること

は益にならない」とも語り、米側の提案を安易に受け入れないとの姿勢を示した。

また、旧ソ連圏の一員だったチェコと現在のロシアとの関係について「今は普通の関係になりつつあり、ロシアも海外の国のひとつでしかない」と言い切った。

最後に司会者が日本とチェコの関係について質問したが「両国の関係は問題ないので今まで質問がなかったと思う」と述べ、良好な関係に自信を持っていることを印象付けた。

毎日新聞編集委員 飯島 一孝



「2島 + a」とは何か。「限りなく4島に近い場合から2島に近い場

▼「2島+a」―ロシアを動かすか？
 「北方領土問題についてしゃべるのはこれが最後」
 語る会で岩下氏はいきなりこう切り出した。領土問題をめぐる麻生外相の発言が論議を呼ぶ中、問題の現実的な解決策を採った岩下氏の著書が大佛次郎論壇賞を受賞したことでその発言に関心が集まっていた。
 岩下氏は自らを「3島返還論者」でも「面積2等分論者」でもなく、「2島+a論者」だと宣言した。「4でも0でも、2でもなく」というわけだ。そのアプローチはロシアと中国が国境問題を解決したやり方を北方領土問題に当てはめてみようというもの。キーワードは「ファイフ・ファイフティ」。「分け合うという精神」が大切だと強調する。

「国内で意見の違いはあっても、ロシアに対しては領土を返せと声をそろえるべきであり、外と内とのバランスを取って、ロシアを一步でも動かさねばならない」
 NHK解説主幹 山内 聡彦

2・15(木)著者と語る「北方領土問題」4でも0でも、2でもなく」司会 田嶋史郎委員 出席 92人

合まで」があり、それぞれにどんなメリットやデメリットがあるのか分析し提示するのは極めて重要だ。
 しかし、「ファイフティ・ファイフティ」といっても、強硬なロシア側は乗ってくるのか。岩下氏によると「折半とか3島とか言ってもロシア人はとんでもないことだと思っている」。
 日ソ国交回復から半世紀。事態を打開するにはトップ同士の政治決断しかなく、勝者も敗者もない互いに納得できる解決が求められている。
 岩下氏の問題提起は大胆で具体的で示唆に富んでいる。しかし、中口と日口は事情が違う。日本が不利な状況なのに今なぜ解決を急ぐのかという反論もある。
 とはいえロシア側は2島返還まで戻ってきた。岩下氏が言うように、大事なのはロシア側を一步でも踏み出させることだ。

岩下 明裕 北海道大学
スラブ研究センター教授

2・15(木)著者と語る「北方領土問題」4でも0でも、2でもなく」司会 田嶋史郎委員 出席 92人

桜井 啓子 早稲田大学教授

2・19(月)著者と語る「シーア派」司会 中井康朗委員 出席 10人

▼シーア派の実像を解説



「結局第十二代イマームは、信徒と直接に触れ合うことができない【お隠れ】(ガイバ)状態に入った

優れた専門家の話には「もうかった」と思うことが多い。
 桜井教授の話にもそう思ったひとつが、昨年2月イラク・サーマツラーで起きたシーア派アスカリ廟の爆破に関する解説だった。このテロを契機にイラクが内戦状態に陥ったことはよく知られている。
 桜井教授は、アスカリ廟の爆破にシーア派が激怒した理由について、同廟の破壊により、シーア派が救世主と見なす第十二代イマーム(最高指導者)が再臨できなくなると懸念したためだと語った。正直言って、初めて聞く解説だった。
 第十二代イマームは少年時代の西暦874年、突然失踪したとされる。これについて、桜井教授は著書「シーア派」30ページに、こう書いている。
 「結局第十二代イマームは、信徒と直接に触れ合うことができない【お隠れ】(ガイバ)状態に入った」という解釈が受け入れられていった(中略)。「隠れイマーム」となった第十二代イマームは、終末直前に救世主(マフディー)として再臨して、人びとをこの世の悪から救済してくれると信じたのである」
 さらに、31ページには「シーア派によれば、サーマツラーにある第十一代イマームの墓廟の下には洞穴があり、その洞穴のなかの一室には扉があり、この扉の向この部屋の隅に、第十二代イマームが消えた泉があるという。人びとはこの泉に集まり隠れイマームの再臨を祈る」とある。
 ここで言う第十一代イマームの墓廟こそアスカリ廟だ。つまり、シーア派は同廟の爆破によって泉も破壊され、救世主の再臨の出口が塞がれたと懸念し、激怒したというわけだ。
 さて、会後半の参加者の質問も熱の入った内容が続いた。桜井教授の話に参加者の知識欲が強く刺激されたからに違いない。まさに「もうかった」有意義な会だった。
 読売新聞出身 藤原 和彦

山谷 えり子 首相補佐官(教育再生担当)

2・21(水)記者会見
司会 矢島誠司委員 出席 97人



▼身構えるスポークスパーソン

安倍内閣の一枚看板とも言える教育改革。そのスポークスパーソンだ。昨年10月から、教育再生会議担当室の事務局長として、関係機関との調整役を担い、様々な批判の矢面にも立ってきた。

再生会議は、文部科学省・中央教育審議会や自民党文教族との様々な確執が伝えられてきた。会議の中枢メンバーで詰めた提案は、アドバルーンのように上げては引っ込めることが繰り返され、「迷走」という言葉さえも飛び交った。首相直属の会議といっても、足元は強固ではない。それだけに、事務局長には、官邸を一步出れば「7人の敵」がいるのかのように身構えた姿勢が見える。

その姿勢が会見にも表れた。「ゆとり教育の見直し」など、1月に再生会議が出した第一次報告の「7つの提言と4つの緊急対応」の説明に終始した。再生会議の議論に裏打ちされた教育論を聞きかたが、報告がまとまったときの記者会見との差を見つめるのは難しい。発言のぶれを嫌うとされる首相にならつてのことかと言いたくもなる。

それだけに、「中教審もフル回転で充実した審議をいただくことになっている」「中教審のメンバーも、それぞれ、すばらしい方たちばかりで」と、中教審に配慮した発言だけが目立った。

「再生会議で中教審にメスを入れたい」という勇ましい発言が報道されたのは、わずか2週間前、水戸市で行われた講演でのことである。その真意を質問されると、発言そのものをあつさり否定してみせた。

再生会議はようやく、一部の審議を公開とする方向になった。世論に押された異例の決断だ。公開を機にもっと世論を味方につけてほしい。読売新聞解説部次長 中西 茂

鈴木 透 慶応大学教授

2・26(月)「アメリカの底流」③
司会 中井良則委員 出席 105人

▼映画をネタに現代アメリカ論

アカデミー賞発表の日にアメリカ映画の話をしてもらった。しかも、テーマはクリント・イーストウッドの硫黄島2部作。作品賞か監督賞をとつていけば、世界で最も早い受賞記念レクチャー?となるところだったが、惜しかった。



「立ったままの方がいいので」と座らずに1時間、話せば話すほど熱気が高まる。映画をネタに現

代アメリカ論をこんなに展開できるとはおもしろい。

イーストウッド映画を読み解くキーワードは「神話の解体」「弱者への視点」そして「記憶の扉」だという。米兵の息子が父の思いと行動を探る「父親たちの星条旗」。洞窟に残された日本兵の手紙が見つかる「硫黄島からの手紙」。どちらも、封

印された記憶を後世の人間がひもとく構図が同じだ。「星条旗」は栄光の伝説となった星条旗掲揚の神話を壊し、「手紙」は狂信的で野蛮な日本兵というステレオタイプを否定する。日本兵も米兵も家族こそ大事だったのに権力に利用される。敵と味方に共通点を探す映画だ。単純な二項対立の図式とは違う。

「手紙」で初めてイーストウッドは国境の外に出た。この意義は深い。日本人の記憶をとりあげ、他者の立場を想う想像力の重要さを示した。これからのアメリカにとって「外部の目」こそ大事であり、アカデミー賞候補になっただけでも、この映画の価値が認知されたといえる。日本の映画人は「やられた」という感覚を持ってほしい」

イーストウッド主演・監督「ミリオンダラー・ベイビー」のフランキーと栗林忠道中将の共通点は「才能があるのにお払い箱」など映画好きなら、ふむふむ、とうなずく話が続出した。「慶大で一番おもしろい授業」と評判なのもわかる。

毎日新聞論説委員 中井 良則

岡部 信彦 国立感染症研究所
感染症情報センター長

2・28(水)研究会「新型インフルエンザ」
司会 宮田一雄委員 出席 47人

▼「論議の場」―メディアの役割

危機感をあおり過ぎるのも、安心させ過ぎるのもよくない。大流行したら大変だと言われている



新型インフルエンザの記事を書く時にいつも悩むのは、どんな書き方をすれば現状を正しく反映した「適度な危機感」を表現できるかということだ。

感染症の専門家も人により危機感の表し方が違うが、バランス感覚に定評がある岡部氏のスタンスは、真ん中よりやや「火消し」側か。

研究会はインフルエンザのイロハから最近の世界情勢、厚生労働省が最近まとめた、新型発生時の早期対応に重点を置いた行動指針案の概要まで、いねいにカバーされていた。聞く人によって面白いと思う箇所は異なりそうだが、私が個人的にメモしたのは次の2点。

まず新型への変異が懸念されるH5N1型ウイルスは、人での致死率は

約60%だが、大流行する場合には致死率は大幅に下がるとみられること。ただし具体的な予想は

と。ただし具体的な予想は難しく、数%以上(毎冬流行するインフルエンザの致死率の10倍以上)程度と想定されること。もう一つは「鶏肉や卵からの感染はない」というのは言い過ぎで、

病気の鶏が市場に出回るような状況では、理論的に感染の可能性は否定できないという点だ。

行動指針案は計13分野にもわたるので内容を要約するのは難しいが、よく分かったのはまだまだ国民を巻き込んだ議論が必要な「未完成品」だということ。例えば新型の流行が確認されてから最初のワクチンができるまでに半年から1年かかるが、限られたワクチンを誰に先に打つか、

指針案は複数の考え方を示したが、専門家だけではとても決められない。明らかな不利益を伴うだけに100%のコンセンサスも難しい。岡部氏は、政治的な判断の必要性に言及したが「論議の場」としてのメディアが、どう取り組むかも問われる。共同通信科学部 吉本 明美

「安倍内閣は大丈夫か？」という刺激的なテーマで、1時間15分のトーク。柳沢発言や政府税調会長辞任、郵政造反議員の復党などマイナスイメージはあるが、日中首脳会談の実現、教育基本法の改正、防衛庁の省格上げなど評価すべき点はあるのに、長い目で見ようとする点はあるのに、問題がある、とまず自己批判？

支持率低下というが、橋本さんが担当した中曽根内閣に比べれば安倍さんの出足は「まだまし」。弱みはリスク・マネジメント。迅速に対応すること「痛手を少なくする」ことが肝心なのに、そのあたりの「反射神経」が小泉さんと違って足りない。



第8回「賛助会員の会」(2.20)
橋本 五郎・読売新聞特別編集委員

外国大使館の会員も参加したが、やはり安倍・小泉比較が一番面白かったらしい。「小泉さんのあとではだれがやっても苦しい」(豪・ウォレス書記官)、「安倍さんはそれでも40%近くの支持を得ている。大変な数字だ。不思議なのは、民主党の不人気。強い野党が存在しないこと」(仏・ボネル広報部長)、「小泉首相の4つのない」という説明は良かった」(NZ・クランプ調査官)、「橋本さんのプレゼン是非常に刺激的で、ユーモアのセンスにあふれていた」(カナダ・ラカス一等書記官)等々。

その小泉さんは「変えない」「迷わない」「聞かない」「頼まない」の4つの「ない」で、自分の信念を曲げず、強力な指導力を発揮して、高い支持率を続けることができた。安倍さんは小泉さんとはすべてで反対であるが、何をやるかを決め、自分の政策に優先順位をもたせて「着実にやる」ことだという。

「小泉さんは国民的には不人気なアメリカのイラク政策を断固支持しているわが国の首相(ハワード氏)と似ている」とも語っていた。この会が行われた翌朝の各紙が、小泉さんの「鈍感力」メッセージを伝えた。「単なる偶然」にしてはできすぎ!?

大使館の会員に「次に取り上げるべき話題は？」と聞いたら、「中央と地方の関係」(カナダ)や「若者の意識がわかるようなもの」(仏)という答えが返ってきた。(春海)

2月、独ミュンヘンで開催された国際安全保障会議におけるプーチン・ロシア大統領の演説は、異例なものとして受け止められた。米国の対外政策が「世界を危険に陥れている」と決めつけるなど、通常、直接的な物言い避けるロシア最高実力者の言葉とは思えないような内容だった。

冷戦の再来かと一部マスコミが報じる中、同じ会議に出席したゲーツ米国防長官は「冷戦は一度でたくさん」と受け流した。が、大統領の痛烈な対米批判に、大ロシアの攻撃性を感じ取った関係者は少なくなかったようだ。

何故の、鼻息の荒さか。日本の商社も参加する「サハリン2」開発プロジェクトの1件が直ちに思い起こされる。ロシア当局に環境破壊を指摘され、メジャーや日本商社が持っていた経営主導権は結局、ロシアの巨大ガス企業「ガスプロム」に移った。

「ロシア研究会」

多角的に方向性を探る

4月からスタート

昨年ウクライナとのトラブルに続いて今年も、ベラルーシを相手にガス輸出問題がこじれた。ロシアの強気の背景に、世界有数のエネルギー資源国であるという現実があるのは、間違いない。原油高で国庫は潤い、膨大な収入をテコに、国際舞台での発言力も増してきたのだろう。

一方、エネルギー問題と並行して、国家機関に属さない限り入手困難な放射性物質を使用した元スパイ暗殺事件が発生する。国家によるマスコミ統制が進む。これもロシアをめぐる現実である。

一体、ロシアはどこへ向かって進むとしているのか。来春の大統領選へ向け、政治の季節に入ったロシアをできるだけ多角的に探ろう、というのが、4月に開始予定の「ロシア研究会」の狙いである。

まず、ロシアは世界をどのように見ているのか、との観点から、都甲岳洋・元駐露大使に総括的なお話をうかがう。

企画委員 中井 康朗
(読売新聞論説委員)

マイBOOK マイPR

さようなら、みなさん！
鳩山日ソ交渉五十年目の真相

堀 徹男
(NHK出身)

領土はなくならないが、シベリア抑留者の生命には限りがある。

半身不随の鳩山一郎首相が河野一郎と共に、「日ソ国交回復交渉」に命を賭した。国交正常化後50周年目に公開された日本側とソビエト側の会談記録を対比させながら、ギリギリの交渉を再現。冷戦時代の中、アメリカからの脅しと自民党内の反対派による党議拘束に思いながら、拘留者の帰還・国連加盟を果たし、玉虫色扱いに持ち込んだ北方領土問題の原点を抉る。

(木本書店 1680円)

サステナビリティ経営

三橋 規宏
(日本経済新聞出身)

最近、サステナビリティ(持続可能性)という言葉が叫ばれるようになった。その理由は現在の地球がサステナビリティを失ってしまったからである。地球は有限な存在だし、生態系が破壊されれば、きれいな空気や水も失われてしまう。未来世代

への利益配慮も必要だ。企業が永續するためには以上のようなサステナビリティの視点を経営の中に組み込まなければならぬ。これからは、社会に必要とされる企業だけが生き残れる。そのためには、明確な企業理念の提示とそれに基づく透明度の高い環境経営の実践が不可欠だ。

(講談社 2310円)

裏中国史 墓どろぼうは金持ちへの道

山本 展男
(毎日新聞出身)

中国政府は墓泥棒の横行に手を焼いている。中国は昔から厚葬の国である。人知れず眠っている古墓を掘り当てれば、副葬品のお宝が驚きの高値で日本や欧米の愛好家に売り飛ばせる。墓ドロは大昔からいたのだが、人民中国でも1980年代後半から、開放政策に乗じて復活してきた。貴重な文化遺産の流出に政府は頭が痛い。墓泥棒の暗躍は中国史の点景ではあるのだが、深刻だが卑しく、どこか滑稽な墓泥棒…。

(講談社 1575円)

『記者魂の半世紀』記事評論集

05年に死去した故西岡将会員（東京新聞）の遺稿集（A5判570頁）が節子夫人からクラブへ寄贈されました。社会部からスタートし、ボン特派員時代はチェコ事件を取材、退社後もライフワークとしてドイツの問題に取り組んでいました。

西岡さんは自身の記事のほとんどをA4サイズに統一して2部ずつ

リレー エッセー

北国支局③ 秋田



冬の川反を想う

と、へ今でも甘酸っぱい気分になる。

中長町の支局から数分、清流・

旭川にかかる小さな橋を渡ると、

そこが秋田一の艶っぱい街・川反

である。夜9時、不急の原稿をパ

ック便で秋田駅から東京本社へ送

り出すと、支局長が立ち上がる。

「さあ、いくか」

秋田の雪は横から降ってくる。

日本海から、うなりを伴って吹き

上げてくる風雪は、数メートル先

まで閉ざしてしまふ。それでも川

アイルしていたそうです。「残された膨大な資料は主人の記者魂の記録であり、それを何とか形にしたかった」と。

同期入社松永太会員を中心に、編集作業が行われ、未発表の論文のほか社説、筆洗、社会部、特派員時代の記事と論評237本が収録されています。ラウンジの図書コーナーで閲覧できます。

反の魅力には勝てない。角巻きを粹にまとった川反芸者に「お晩です」と声をかけられるたびに僕たちは歓声をあげた。

1960年4月、入社早々の僕は秋田支局勤務を命じられ、生まれて初めて北国で暮らすこ

県版トップ：三度の駄目だし

▼中馬 清福

とになった。支局は仕舞屋風のおんぼろで、4月でも夜は冷えた。

酒を覚えたのも、秋田弁の、まことにくさい「秋田音頭」の替え歌

を覚えたのも、ここ川反である。県

庁汚職で自死した男と関係があっ

た、といううわさの秋田美人を知っ

■会議報告

第362回企画委員会（2・8 宴会場）

5月24日の総会記念講演の講師候補などについて協議した。

出席 宇治委員長、宮田、中井（良）、

山田、春名、菅沼、長谷川、田崎、

影山、川戸、井田、和田、柴田の各

委員。

第279回会報委員会（2・9 小会議室）

3月号の編集や4月号から交代す

たのも川反だった。

61年師走。元旦の県版トップ記事はお前だ。支局長は記者2年生の僕に川反でこう命じた。

こんな話が入ってきた。「鳥海山に近い県南の由利町に不毛の原野がある。そこを酪農で開拓しようとい

う若者たちがいるそ

うだ」。

羽後本荘駅で降り

タクシーに声をかけ

た。渋るのを拝み倒

して数時間。広大な

荒れ地だった。つい1週間前、電灯

だけはついたという住居に10人ばか

りの開拓民が集まり、歓待してくれ

た。

牧舎に泊まり、早朝、写真を撮っ

て支局に戻った。まだ生乾きの写真

を見て支局長が言った。「躍動感が

る「写真回廊」短文担当者候補などについて協議した。

出席 住田委員長、池谷、石田、伊藤、仙石、高橋、西田、松本の各委員。

第354回会員資格委員会

（2・16 小会議室）

3月1日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 石井、高畑、泉、二藤部、今

井、田中の各委員。

ないね。撮り直し」。

撮り直して言ったって！支局長は「そう、もう一度」。

次も駄目。3度目。さすがの開拓民たちもあきれ顔だ。それでも懸命にポーズをとってくれた。

3度目の写真も支局長は気に食

わない。もう一度、行くか。

支局長の長老、牧野雄一郎、薬谷

直人の両氏が声をあげた。「もう、

いいでしょう、これで」。

なぜか、支局長もほっとした表

情で、うん、これでいくか、と言

った。そして僕たちはそろって川

反へ出かけた。

（ちゅうま・きよふく 信濃毎日

新聞主筆、元朝日新聞記者）

このシリーズは駆け出しのころ北国支局を経験した会員の。記者青春時代をバトンでつなぎます。

「クーデター」の洗礼

東南アジア特派員の往時茫々



北畠 霞

1950年代から60年代にかけて東南アジア諸国ではクーデターが多発した。発展途上のため政情不安になりやすく、国内で唯一まとまりのある軍部が民間政権に揺さぶりをかけたり、軍部の派閥間の争いが表に出たりすることが多かったからだ。

そのころ東南アジアで特派員をした記者は大なり小なりクーデターの洗礼を浴びている。私は行くところ常にクーデターにぶつかり「クーデター男」になった感があつた。

●サイゴン：「上を向いて歩こう」

古い話になってしまうが、南ベトナム共和国（当時）のゴ・ディン・ジエム大統領が殺害されたクーデターは1963年11月だった。短期の取材旅行で、このクーデター直前にサイゴン（現ホーチミン市）を訪れ、

クーデターを知ったのはラオスにいるときだった。そのときのサイゴンの暗い雰囲気はいまだに忘れられない。ラオスから数日たつてサイゴン入りしたが、政情不安は一層ひどくなっていた。

東南アジア特派員としてサイゴンに赴任したのは1965年2月のこと。そのころも毎日のようにクーデターのうわさがあつた。支局助手のボ・バン・トさんは何かというと

「大変です。明日、クーです。これがその閣僚名簿！」

と息を切らせて帰ってくる。情報はおおむねガセネタだったにせよ、軍部内で動いているグループが実際にあつたのかもしれない。

6月になると一部高級将校によるクーデターの試みをゲエン・カオ・キ将軍が押しつぶし、自ら政権を握

った。こうした事態になると、戒厳令や非常事態が宣言されたり、夜間外出禁止令が出たりする。外出禁止時間（このときは午後10時～午前6時）開始前までに原稿を電報局に持っていくかねばならないが、時には外出禁止の時間帯に入ってしまう。

今と違ってそのころは、タイプライターでローマ字の原稿を作らねばならなかった。電報局員はそのローマ字原稿をティックカーという細長い紙のテープに、それぞれのローマ字に対応する穴をあけ、それを機械にかける。これが本社の外信部なり外報部なりの受信機に入り、穴の字を読み取ってローマ字の原稿が出てくる仕組みである。

というわけで、情報入手が少しでも遅くなると外出禁止にすぐひっかかる。そういう時はどうするか？

「そういう時はな、なるべく大きな道路のど真ん中を一人で、大声で歌を歌いながら歩くのさ。複数で歩くと怪しまれるから、一人でだぞ。こそこそと裏道を行けば警備の兵士の目を引き、悪くすれば撃たれる」というのが50年代初めからバンコク支局で活躍した先輩の助言だった。

これを思い出し、「上を向いて歩こう」を大声で歌いながら電報局に行つたものである。

●ジャカルタ：「暗号作戦」

サイゴンに赴任した年の9月30日に、こんどはインドネシアでスカルノ大統領追い落としのクーデターが発生した。現地に支局が置かれていなかったの、いちばん近いサイゴンから行けという指示で、ジャカルタ行きを目指す。ビザを取るのに手こずって現地に入ることができたのは十日もたつてから。悪いことにはここでは外出禁止は午後6時から始まる。当時は足で三輪車をこぎ、客を後ろに乗せる「ベチャ」がほとんど唯一の交通手段だったので、帰る時間の関係から午後4時になるともうどこにも行つてくれない。

現地には早くから他社が支局を開いて活発な活動をみせており、東も



スカルノ大統領支配終幕——クーデターを支持しパレードする若者たち (1966. 3. 12) =筆者撮影

西も分からぬ当方は戸惑うばかり。シビレをきらせた東京はインドネシア取材の切り札である奥源造デスクを支局長として送り込んでくれた。奥支局長は東京外語大のインドネシア語科卒業で、現地での人脈も豊富なのは言うまでもない。

早速二人で9・30事件後の動きを分析し、必ずもう一度、軍部が動いて名目だけになっていくスカルノ大統領を完全に追い落とすだろう。そのときのために、どうすれば本社の

最も早く知らせられるか。簡単な暗号を作り、これを事前に本社に知らせておく。一方、こちら現地ではマスコミ以外の日系企業に話をつけ、その会社の東京本社に暗号でローマ字原稿を送ってもらい、本社に知らせてもらうのが最善だとの結論になった。

そのころ外国マスコミの使用言語はインドネシア語か英語のどちらかと決められていた。急ぎの原稿は電話で送るが、ついこの前まで有楽町

(その頃まで本社は有楽町駅の近くにあった)のガード下で飲みあっていた同僚と英語で話すと、つい「それでね」などと日本語の合の手が入る。すると「スピーク・イングリッシュ・プリーズ」と怖い男の声で警告が入る。原稿も英語で書かねばならない。このあと英語で文章を書くのが苦にならなくなったのはクーデターのおかげである。しかし、実際にわれわれが考えているような事態(スカルノ大統領の最終的な追い落とし)になれば、英語の原稿では検閲に引っかかるだろう。そもそも電

話もかけられないのではないか。

●「淀君は無事」

ところが民間企業はローマ字による情報送信が許されていた。これに目をつけた奥支局長がその広い顔と信用を活用してある日系企業に頼み込み、いざとなれば営業活動を装って東京に送信してもらうことにした。そのためには新聞原稿の用語は使えない。

そこでスカルノを「秀吉」、スハルト將軍を「実盛」、デヴィ夫人を「淀君」などあらかじめ決めておき、ローマ字化するにも若干工夫をこらして、暗号一覧表を東京本社に送り、その日を待った。

1966年3月12日未明、待ちに待った連絡が、かねて出入りの将校や軍部支持の学生から入った。「今朝6時15分からのラジオ放送に注意するように」

その放送内容でわれわれが予測していた状況になったことを確認して、送信をお願いしていた会社のオフィスに走った。

そのとき打った原稿は直訳すると「実盛の反秀吉ボンコツは事実上終わった。淀君は無事」という噴き出しそうな文章だが、暗号表から「スハルトの反スカルノ・クーデターは

事実上終わった。デヴィ夫人は無事」と訳せる仕組みである。手書きの数枚の暗号表は、今も私のアルバムに残されている。

この記事は当日の12日夕刊に間に合い、外国通信社も引用する特ダネとなった。



その後、ワシントン支局勤務となり、もうクーデターと縁は切れただろうと思っていたところ、1973年9月、チリでアジェンデ政権を倒すピノチェト將軍のクーデターが発生した。

「クーデターなら任せてください」と支局長に自ら買って出て、隣国アルゼンチンの首都ブエノスアイレスで数日、待機して最終的にはチリの首都サンチャゴに入れたが、歴史に残る流血をみたこのクーデターの話は、また別の機会にしたい。

きたばたけ・かずみ会員 1932年生まれ 56年毎日新聞入社 65年から83年外信部勤務のほか 東南アジア支局 ワシントン支局長 論説委員など 84年から87年ニューズウィーク日本版創刊のためTBSブリタニカ社勤務 その後 神戸市外国語大学教授 関西国際大学教授 副学長 学長 学校法人「濱名学院」理事長など

日銀追加利上げ

マメまきが生んだ報道の錯綜

窪園 博俊

(時事通信社)

日銀が2月21日の政策委員会・金融政策決定会合で追加利上げを決めた。今回の政策変更をめぐる報道は一時錯綜し、利上げが現状維持かどちらになるか分からぬまま会合を迎えた。1998年の新日銀法の導入以降、報道が錯綜したのは今回が初めてではない。私は97年春から日銀記者クラブに在籍しているが、この間を振り返って『錯綜』の背景を考えてみたい。

■隙もありロジックも迷走

98年春。旧営業局汚職事件の余波が残る中、ある日銀幹部は「これからは君らマスコミも含めてBOJウオッチャーはいらなくなる」と胸を張った。新法下の金融政策は政策委員会メンバー9人の投票で決まり、事前に結論を知るのとは不可能になるためだ。また、説明責任の強化で政策運営の透明性も高まり、BOJウオッチャーがいなくても「金融政策

の行方は十分に予見可能になる」(同幹部)というわけだ。

本当にそうなら、マスコミ各社は夜討ち・朝駆けに奔走せず、「いざれ公表される事実」のスクープ合戦に消耗することはない。事前報道が乱れることもなく、取材は日銀の下した政策判断の論評・解説を重視する方向にシフトしたはずだ。決定会合に際しては結果発表を静かに見守るのが恒例となっただろう。これは金融政策の伝えられ方としては理想的な姿だと言える。

現実しかし、理想とは程遠いところにある。新法導入前後から経済は未曾有の危機に陥り、前例のない超金融緩和を迫られた日銀は余裕を失いがちとなった。組織内の慌しさは「何かやりそうだ」との雰囲気醸し出し、マスコミに事前報道される隙(すき)を与えた。さらに、政策運営のロジックは迷走し、金融市場を驚かさず政策判断をたびたび行な



身内に反対もあった今回の利上げ決定後に福井総裁が会見(2.21)＝時事

った。

今回の政策変更では、前回の会合前に利上げ報道が集中する事態が生じた。私自身も1月の利上げを予想していた。政策委員会の民間委員の間では昨年末から利上げ機運が広がっており、総裁ら執行部側が同調しない理由は見当たらなかったから。なぜ予想は裏切られたのか。

岩田一政副総裁は利上げに反対票を投じた。恐らく1月の時点から反対の意思を固めたのだろう。一方、福井俊彦総裁は執行部の票が初めて割れる状況に直面し、リーダーシップの発揮にためらいを覚えたのではないか。また、消費・物価の下振れ

で経済の先行きへの自信が微妙に揺らいだのだろう。

■BOJウオッチャーも混乱

私も含めてマスコミは「マメを食うハト」だと思っ。何かニュースになりそうなネタ(マメ)はないかと日々明け暮れている。会見や講演など「マメまき大会」のようなもので、しかも先進国の中ではその回数が異常に多い。日銀マンは報道過熱のたぎに「もっと冷静に」と訴えるが、マメ探しに必死のハトは何かあれば殺到し、ときに混乱状態(報道の錯綜)に陥るわけだ。

対極的なのが米連邦準備制度理事会(FRB)だ。その情報発信は非常に絞られ、議長会見もない。そこまで徹底しないとハト集団の制御は難しいのだろう。日銀は真面目な情報発信は多く、総裁は多く語り、時に揺れ動く。餌付け状態のハトは今後も群れ続けるはずだ。報道の錯綜はいつかまた起きる。金融政策を静かに見守るのが普通の光景になるのを私は見ることなく現役を終えるだろう。そういう思いを強くしたのが、今回の政策変更劇であった。

くほその・ひろとし 1989年入社
外
国経済部 ロンドン特派員などを経て
97
年から日銀クラブ担当 現在 編集委員

米アカデミー賞

悩みのドレスコード、着物で取材

▼國枝すみれ
(毎日新聞社)

今年はスコセッシ監督の年だった。「デイパーテッド」で念願の監督賞を獲得。リメイクだから無理との下馬評を覆し、最優秀作品賞も取った。

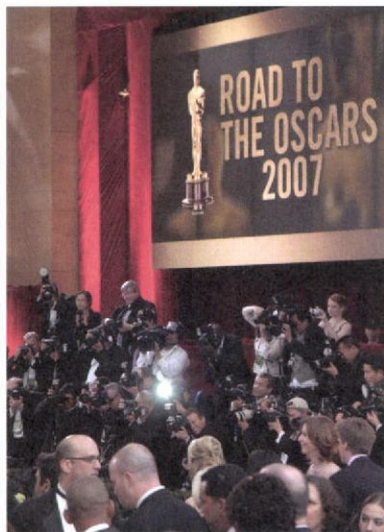
感動すると同時に、がっくりする。「これで予定稿は日の目を見ない」。「硫黄島からの手紙」や「パベル」が作品賞、菊地凜子さんが助演女優賞の候補となるなど、ノミネーション段階で日本関連作品が多かった。それぞれが勝った場合に掲載する原稿を用意していたのだ。

アカデミー賞取材は、ノミネーション発表から始まる。1月23日午前3時半、外は真暗だ。眠い目をこすりつつ、アカデミー事務所に向かう。候補の発表はいつも午前5時半きっかりに始まる。東部時間の朝のニュースに合わせ発表するからだ。発表は5分ほどで終了するが、その5分のために記者たちは何時間も待つ。私は低血圧なので、夜更かしは得意だが、朝は苦手だ。このつらい

作業がめぐつてくると、今年も「春が来た」と思う。

■記者室はまるでハト小屋

授賞式には報道陣1896人が集まった。01年の9・11テロ以降、会場のハリウッドのコダックシアターは厳戒体制。爆弾テロを警戒して、周辺は全面通行止めになる。通行証を取った記者は遠く離れた指定駐車場に車を止め、シャトルで会場に向かう。歩く通路も決められており、記者室に到着するまでに1時間はかかる。



レッドカーペットで取材する報道陣
コダックシアター=2. 25 筆者撮影

さらに面倒なのがドレスコードだ。

授賞式取材は、男性はタキシード、女性はロングドレスの正装が義務づけられる。前任の先輩記者の引き継ぎは1点だけ、「着物を持ってきなさい」だった。日本人は足が短く、西洋人の体に合わせてつくられたドレスは似合わないというのだ。仕方なく、祖母の着物を数着持ってきたが、なにせ着物を着たこともない。

転ばないか心配で、1年目は「男装してタキシードで行こう」と真剣に考えた。だが、アカデミー関係者が、「ロングドレスなんか持ってない」とこねた米国人記者を「短いドレスで来たならつまみ出します」と怒鳴りつけたのを目撃して、あきらめた。結局、この4年間、着物を着ている。

俳優はレッドカーペットを通り過ぎると、授賞式会場に入り、我々は記者室に入る。与えられる机のスペースは約50センチ。ハト小屋のハトのようにぎっしり並んで座った記者たちは、授賞式をテレビ映像で見ながら、イヤホンで音声を聞く。オスカーを獲得した俳優だけが記者室に入ってきて、記者の質問に答える。

佳境に入ると、目はテ

レビの授賞式の進行を追い、耳で記者室で行われているインタビュを聞きながら、ラップトップで記事を書く、という恐ろしい状態となる。

■ロス特派員も楽じゃない

毎年、1カ月以上続くアカデミー取材が終了すると、どっと疲れる。一方、業界人のプロ根性には毎年のように感動する。家を担保に借金をして映画を製作する監督や、極貧生活からは上がった女優もいる。記者室ではそんな裏話も出るが、カメラの前では、苦勞の影はちらりとも見せずに、婉然とほほえむ。映像の都ハリウッドは、虚飾の街とも呼ばれる。実態を見せることではなく、夢を売ることが商売なのだ。

さんと輝く太陽の下、シャランパンをすすりながら、女優をインタビュー。ロサンゼルス特派員のイメージは、こんな感じなのだろう。「いいねー、ロス生活」とよく言われる。つい、「結構、大変なんです」と口をとがらせてしまい、その度に反省している。「なかなかですよ」と意味深げにほほ笑むくらいにならなくては、とてもこの街に住む資格はないのだ。

くにえだ・すみれ 1991年入社 英文
毎日を経て 03年からロサンゼルス特派員

豪雪都市の暖冬

少雪に悲喜こもごも
リンゴへの影響も懸念

▶三好 陽介
(東奥日報社)

「雪かきが必要なく、本当に楽」こんな冬は経験したことがない」。市民の間で雪の話題が絶えることがないほど、この冬の青森市内は雪が少ない。

青森市は都道府県庁所在地で唯一、全域が特別豪雪地帯に指定されている。一冬に降る雪の合計は平均7メートル74センチ。10メートルを超えることも珍しくない。この雪の量は人口30万人規模の平野部の都市としては他に例がなく、「世界一の豪雪都市」とも言われる。2年前には観測史上4位となる積雪1メートル78センチを記録、住宅が雪の重み

でつぶれる被害が相次ぎ、市民生活に大きな支障が出た。

しかし、今冬はとにかく雪が降らない。降ってもすぐに溶けてしまう。連日アスファルトが顔を出し、1月の月平均気温は122年間で2番目の高さ、月降雪量は55年間で最少と、記録上からも異常気象が裏付けられている。

肉体的、精神的な負担が大きい除雪作業から解放される一と、少雪を歓迎する市民は多い。雪が降り続けると、自宅の除雪は1日に数回必要だ。次第に雪を捨てる場所がなくなり、隣家とのトラブルの原因にもなる。青森県内では昨冬、屋根の雪下ろし中の転落などで7人が犠牲となり、けが人は182人に上った。だが今冬は、雪かきに追われる市民の姿はほとんど見られない。

財政難に悩む自治体にとっても、道路の除雪費が抑えられるメリットは大きい。昨冬まで2年連続の豪雪で青森市の除雪費は予算をオーバーし、決算額は2004年度が約30億円、05年度が約23億円。道路除雪は行政に対する雪対策の要望の大半を占めるが、春になると消えてしまう雪に大金を投じなければならぬ自治体の立場は複雑だ。



いつもはこんな風景なのに…昨冬の青森市内。通学路も雪で埋まった (2006. 2. 14)

影響も懸念されている。

雪は決して厄介者ではない。青森市の水道水が「日本一おいしい」と認定され、夏に水不足の心配がないのは、冬の間、山にたつぷりの雪が降るためだ。このまま地球温暖化が進行すれば、青森県の主産業であるリンゴ栽培に影響を与えるとの予測もあり、気象に敏感な農業関係者には不気味な暖冬に映る。

雪国の住民にとって、春を迎えた時の喜びは格別だ。街では「ここまで雪がないと、冬らしくない」との声も上がり、市民は複雑な思いで雪のない冬を過ごしている。

みよし・ようすけ 1996年入社
読部 政経部 弘前支社編集を経て
2004年から社会部

一口メモ 青森市

人口は31万2498人(1月31日現在)。2005年4月、旧浪岡町と合併し人口30万人以上の要件を満たしたため、06年10月に中核市に移行した。「雪中行軍」で知られる八甲田のふもとに位置し、八甲田を迂回する南西風が市街地に大雪を降らす一因とされる。青森地方気象台の観測によると、これまでの最深積雪は1945年2月の2メートル9センチ。青森市は雪対策の立場からも、郊外の開発を抑えて中心部に機能を集約する「コンパクトシティ」構想を掲げ、全国から注目されている。

東国原知事

変化を望んだ県民
息を潜める県議会

▶ 森 耕一郎

(宮崎日日新聞社)

温和で変化を好まない県民性と言われる宮崎で、元タレントの東国原英夫（そのまんま東）知事が誕生した。しかも、「保守王国」と呼ばれる土地柄である。全国的に「そのまんまショック」と呼ばれているが、投票行動を起こした地元有権者も、この結果を驚きを持って迎えた。その余韻は今も残っている。

宮崎では、県選出国会議員5人のうち4人、県議42人のうち32人を自民で占める。この寡占状態を自民友好経済10団体と称する建設業協会、農協、商工会議所、商工会などの主だった経済団体が選挙の際に下支え



出直し知事選で圧勝した東国原氏 (1. 21)

するのが「保守王国」の構図だ。業界は推薦候補に大量の運動員を提供するなど積極的に選挙に関与。「見返り」に公共工事、国・県の補助金といった利益誘導を期待する。

この「もたれ合い」とも言える構図は、2003年まで6期24年にわたった松形祐堯元知事の長期県政のもとで肥大化した。膨大な数の団体から推薦を受けた任期中の選挙はすべて圧勝。オール与党の議会と共に推し進めた県政が、停滞感、マンネリ感を生む一因となったと指摘する声は多い。

松形氏引退後、「閉塞（へいそく）感打破」を訴えて登場したのが元県

幹部の安藤忠恕氏だった。「改革派」を自称していたが、選挙時の業者との貸し借りに起因する官製談合事件の主犯として逮捕され、政治不信は一気に高まる。直後の出直し知事選で、保守系2候補を破って東国原氏が圧勝した。その要因は、保守分裂だけではない。「王国」の構図に県民がへきえきとし、事件だけではなく、事件に象徴される官業癒着にも怒っていたからだ。

出直し知事選で、自民と経済10団体は、前回の衆院選で郵政造反組の対抗馬として宮崎3区に自民公認で立候補し落選した元官僚を担ぎ出した。造反議員が復党した選挙区内の混乱を回避しようとする「王国」の論理を優先したからにはほかならなかったが、有権者には見透かされていた。本紙には「自民内の都合で候補者を決めていいのか」という内容の投書が相次いだ。

一方、主要な候補者のうち、この構図と最もしがらみがない東国原氏は、自前のマニフェストで政策選挙に持ち込んだのに加え、芸能界で鍛えられた演説のうまさで見ると、勢いを増した。告示直後から事務所は、手弁当でボランティアを志願する20人以上の主婦らが集まり、

活況を呈した。「演説を聞きたい」という要望が県内各地から陣営に殺到し、そこへ東国原氏が出掛け、さらに演説を聞いた有権者が勝手連的に支持を広げる倍々ゲームになった。県政史上恐らく初めての本格的な「草の根」選挙であった。

就任から1カ月が過ぎ、県議会2月定例議会で論戦が始まった。「芸人に何ができる」と嘲笑（ちやうしよう）していた県議たちは今、息を潜めるように様子をうかがう。4月の県議選も迫っている。一般質問で「あなたは私の若い頃に似ている」と擦り寄る議員もいるほどだ。

もり・こういちろう 1986年人社整理部 報道部県政担当などを経て2003年から報道部デスク

一口メモ 宮崎県

人口115万人。高病原性鳥インフルエンザが1月から県内3カ所を襲い、発生が懸念された。国原知事がこの地鶏専門店が起きている冷や汁、チキンポロツランドを2月にプロ野球5球団

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■「都市問題」公開講座「構造改革特区は分権型社会を創るか」東京市政調査会主催

行革国民会議の並河信乃事務局長が基調講演した後、同調査会が行った「構造改革特区と国・地方関係に関する総合的研究」の報告があり、小川登美夫内閣官房構造改革特区推進室副室長、松本英昭元自治事務次官、中山弘子新宿区長らが討論した。(2.3 10階ホール)

照会先：東京市政調査会研究室 Tel：03-3591-1261
http://www.timr.or.jp/

■デイリースポーツ社制定 2006年度ホワイトベア・スポーツ賞(第46回)表彰式

アマチュアスポーツで功績のあった選手や指導者に贈られる。今回は女子レスリング・吉田沙保里選手、柔道・石井慧選手、陸上・小林祐梨子選手、早稲田実業学校硬式野球部が表彰された。(2.5 宴会場)

照会先：デイリースポーツ社 Tel：050-3383-2531

■「いま、戦争と平和を考える」日本ペンクラブ主催

国際ペン事務局長のジョアン・リーダム＝アッカーマンさんが講演。シンポジウムでは日本ペンクラブの井上ひさし会長、阿刀田高同専務理事、作家の浅田次郎、吉岡忍各氏らが議論をかわした。(2.6 10階ホール)

照会先：日本ペンクラブ事務局 Tel：03-5614-5391
http://www.japanpen.or.jp/

■日本外交協会例会

外務省の谷内正太郎事務次官が「安倍内閣の外交課題」のテーマで講演した。(2.7 宴会場)

照会先：日本外交協会 Tel：03-3584-6200
http://www.spjd.or.jp/

■「第2回日本・アラブ・イスラム・ジャーナリスト会議」外務省主催 読売新聞社後援

日本とアラブ諸国の相互理解を深めるためのメディアの役割についてエジプト、サウジアラビア、ヨルダン3カ国の記者と池村俊郎読売調研主任研究員、出川展恒NHK解説委員が討論した。(2.8 10階ホール)

照会先：フォーリン・プレスセンター Tel：03-3501-3401
http://www.fpcj.or.jp

■広報担当者セミナー「新聞・テレビをうまく活用しよう」エフシーエ総合研究所主催

参加者は企業の女性広報担当者。鶴田東洋彦産経編集局次長兼経済部長と安倍宏行フジテレビ報道局経済部長が講演した。(2.21 宴会場)

照会先：エフシーエ総合研究所 Tel：03-5495-1501

■「ユニバーサル&セキュリティウエア」ショー／「日中共同制服機能性紹介ショー&相談会」記者発表

警察官・消防士の制服など多くのユニフォームの開発・改善・普及活動に取り組んでいる(財)日本ユニフォームセンター主催。働く人を守る「近未来のセキュリティウエア」をコンセプトに開催するショー(3.6~9 東京

新しいOB会員

ビックサイト)の概要を、繊維・アパレル業界の専門紙記者に発表した。(2.23 大会議室)

照会先：(財)日本ユニフォームセンター
Tel：03-3401-2111

■女性のエンパワーメント国際フォーラム「産む・産まない 各国男女事情」読売新聞・女性教育会館女性アカデミア21共催

猪口孝中大教授の基調講演の後、韓国女性開発院のホン・ソンア研究員、パリ市家庭児童局のフレデリック・ルブラン課長、ジョージア州立大学のラルフ・ラロッサ、お茶の水女子大の牧野カツコ両教授らが家庭教育国際比較調査をもとに討論した。(2.24 10階ホール)

照会先：読売新聞調査研究本部 Tel：03-3216-7736

■SIAL-CHINA2007記者会見

世界最大級の食品専門の見本市、パリのシアル(SIAL)が上海で「SIAL-CHINA」を開催する(5.10~12)。主催者のシルビエー・トゥルニエ氏が来日し概要を説明した。出展企業は60カ国1100社を予定。(2.26 大会議室)

照会先：フランス見本市協会 Tel：03-3405-0171
http://promosalons.cc-town.net/

■フィジー観光局総局長会見

政変で観光客が激減した南太平洋のフィジー諸島共和国。ガボカ政府観光局総局長が来日し会見した。日本からの旅行者は年間4万人を越えた時期もあったが、最近では2万5千人ほどに落ち込んでいる。その回復を目的に構成された観光促進委員会のキャンベル・エア・パシフィック航空社長も同席。需要喚起に向けた今後の取り組みを説明した。(2.28 宴会場)

照会先：フィジー政府観光局
Tel：03-3587-2561 http://www.bulafiji-jp.com



出馬表明第一声? 浅野氏のプレスセンター到着を50人近い報道陣が待ち受け質問。都知事選について「気持ちはフリーズ(凍結)からフリーズへ変わってきた」(2.28)

■第4回「企業フィランソロピー大賞」贈呈式&シンポジウム 日本フィランソロピー協会主催

本業を通じて社会問題の解決に貢献した企業を顕彰する。同協会の浅野史郎会長のあいさつに続き、大賞の「アプリシェイトグループ」(大阪)ほか3社が表彰された。同グループは高齢ホームレスの生活改善支援活動を行っている。(2.28 10階ホール)

照会先：日本フィランソロピー協会 Tel：03-5205-7580
http://www.philanthropy.or.jp/

バー、レストラン、宴会

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766



スタンダードジャズ・シリーズ
3月は「Love Me Tender やさしく愛して」



今月は春の訪れとやわらかな陽射しから表現してみました。ドライジンとレモンジュースをベースにした吉富オリジナル・カクテルをお試ください。



個室での歓送迎会プラン

(3月12日～6月2日)

異動の季節です。社内の歓送迎会だけでなくプライベートな集まりにも利用していただける宴会プランを用意しました。お一人3300円(洋食9品+寿司、そば)で、飲物・部屋代は別ですが、1200円をプラスして飲み放題(2時間)にすることもできます。お酒の持ち込みは無料です。10人からお受けします。

予約・問い合わせは3503-2724の貸室担当へ。



花見懐石コース (3月30日まで)

東京都心のサクラ開花日は平年3月28日だそうです。ことしは一体どのくらい早まるのでしょうか。そんなことを思いながら、初春をイメージした品々を揃えてみました。このコースは冷酒つきで5250円です。(板長：薬科浩)

先付：蛤みぞれ和え 椀盛：甘鯛市松 刺身：蛤金箔盛り 焼物：鱈洋菜焼き 煮物：桜花大根道明寺いこみ 揚物：竹の子はさみ揚げ 食事：信州そば 水菓子：桜アイスクリーム



黒毛和牛のシチューコース (4月27日まで)

岩手産の黒毛和牛を赤ワインで煮込んだシチューがメインのコースです。これに、グラスワイン、前菜、ゆずシャーベット、コーヒー、パンがついて2980円です。ランチタイムにもおためしいただけます。(シェフ：黒須修一)

クラブの電話 ダイヤルイン

和食レストラン (9階)	会員事務
3503-2723	3503-2725
洋食レストラン (10階)	経 理
3503-2766	3503-2728
貸室予約、宴会打ち合わせ	
3503-2724	
受 付	会見申し込みアドレス
3503-2721	kaiken@jnpc.or.jp
クラブ行事への申し込み	URLアドレス
3503-2722	http://www.jnpc.or.jp

会報委員会

委員長=住田良能
委員=池谷 忍 石田昭彦 伊藤三郎 仙石伸也
高橋利行 西田善夫 松本侑子
連絡=長谷川和子 本庄五月
(電話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

春のゴルフ会を行います

第88回ゴルフコンペを下記のように開催します。
6組24人を予定しています。初めて参加される方も大歓迎です。

日時 4月27日(金)

9時集合・9時35分スタート

会場 東京よみうりカントリークラブ

申し込みやお問い合わせは事務局の小橋(03-3503-2728)まで。

<寄贈書>

新聞用語集 2007年版 日本新聞協会
都市は誰のものか 都市の主体者を問う 木原啓吉会員

<招待券> ご寄贈いただきました

日本経済新聞社 「パリへー洋画家たち百年の夢展」

<法人会員代表変更>

テレビ新広島

(新) 永野 正雄 代表取締役社長

(旧) 松本 寛

<訃報>

大森幸男会員(日本新聞協会出身 84歳)が2月26日、肺がんのため死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

<会員現況> 法人会員 146社 基本会員 811人

個人会員 1,637人 法人・個人賛助会員 75社 184人

特別賛助会員 76人 名誉・功労会員 9人

計 221社 2717人

HP <http://www.jnpc.or.jp/>

「会見速記録」：2月の新規掲載

- ジョン・ボルトン前アメリカ国連大使「北朝鮮・イラン・日本と国連」(2007. 1. 16)
- 久間章生防衛相昼食会(2007. 1. 24)
- 小沢一郎民主党代表記者会見(2007. 2. 6)

今後の行事予定 (3/2現在)

- 3. 16 (金) 15:00~16:30 (10階ホール)
研究会「中国」④ 阿南惟茂前中国大使
- 3. 26 (月) 15:00~16:30 (10階ホール)
研究会「中国」⑤ 中国の国家戦略と日本
平松茂雄 元杏林大教授
- 3. 28 (水) 15:00~16:30 (10階ホール)
研究会「アメリカの底流」④ ベースボールと野球
ロバート・ホワイティング氏(米ジャーナリスト)

行事案内専用電話 03-3503-3764

日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をテープでお知らせしています。

写真回廊

撮影

江口 聡子

(読売新聞
東京本社写真部)



隆起を繰り返す硫黄島の海岸で波に洗われる船
後方は摺鉢山 (2006年12月 社機から)

東森さん?の Iwo Jima

アナグラムという言葉遊びがある。単語や文の文字を入れ替えれば、全く別の意味が浮かび上がってくる。文字の数の順列組み合わせ分だけ並べ替えができるから、正解があるわけではない。隠された意味をすぐ見つけるのはよけい難しい。

では「Clint Eastwood」のアナグラムは? この13文字を並べ替えると、「あーら不思議。Old West Action」になる。つまり「懐かしい西部劇」。本人がこのことを意識して芸名にしたかは知らない。ちなみに本名は、姓が同じで、名は「クリントン (Clinton)」。遊びはさておき、「ローハイド」のカウボーイ「ロデュー」をはじめ、「荒野」や「夕陽」のガンマン、「ダーテイー・ハリー」などで知られる彼は、このところ映画監督としても優れた映画を世に送り出している。

最新作「硫黄島からの手紙」「父親たちの星条旗」は、同じ素材を日米双方の視点から描いた異例の2部作だ。日本向けの挨拶で、彼はこういつている。「…私が観て育った戦争映画の多くは、どちらかが正義で、どちらかが悪だと描いていました。しかし、人生も戦争も、そういうものではありません」

(橋場 義之)